

しかしここには埋め立て作業にかかわる諸機関があり、資材の搬送や郵便物の配達なども当然されるため、番地がないとさまざまな支障がでる。そこで内側埋立地には現在暫定的に、「江東区青海(あおみ)三丁目地先」という住所が与えられている。「地先」とは、「その先」とか「その近く」という意味である。

埋め立て、その具体的な方法は三通りある。現在主流となっているのは「サンドイッチ工法」とい
い、**ごみの高さが約三メートルになると約五〇センチの土で覆い、それを交互におこない重ねながら埋め立てる方法だ。**

護岸をつくるにあたってまずおこなわれるのが、フェンスづくりである。なんと全長五〇メートルにもおよぶ**鋼管**を立てて、すきまなく一列に海底深く埋め込んでいき、護岸の外枠にあたるフェンスをつくるのだ。これによって埋立地となる場所と海が仕切られることになる。

鋼管の上部は約九メートルの高さで海面上に出す。これはビルの三階ほどの高さに相当し、埋め立て処分場となったときはごみが海面に飛散するのを防ぐ囲いとなる。東京湾の水深は浅いので、海中に打ち込む鉄管の深度は、深くて一五メートル。つまり海面上の九メートルと海中の一五メートルを引くと、鋼管は約二六メートルの深さで海底にしっかりと埋め込まれるわけだ。

しかしこれはまだ護岸づくりの第一歩である。次に、でき上がったフェンスの二〇メートル内側に、止水や土留めとして**鋼矢板**こうやいた（凹凸のハガネでできた矢板）という頑丈な板を、外側のフェンスと同様に打ち込んで島状に囲む。こうして**二重のフェンス**をつくり、その間に砂などを詰めて埋めることにより、護岸は一応の完成をみる。

このようにたくさんの資材を使い、何重にも行程を重ねて頑丈な護岸をつくっておく理由は、実際に埋め立てが進んでくると、堆積するごみ層の圧力が強大なものになるからだ。ごみや土砂が海に流れ出す決壊は、万が一にも起きてはならない。

・・・

平成一〇年から埋め立てが開始された「新海面処分場」は、ケーソン式外周護岸という新しい工法でつくられている。それまでと違う点は、フェンス外側に鋼管ではなく、護岸本体に「ケーソン」という砂や鋳滓こうさい（製鋼スラグ）を詰めたコンクリートの箱（鋼の箱もある）を使うことだ。これによっ

て鋼管を打ち込む時間やコストの大幅な圧縮がはかられている。このように埋め立て方法も護岸の方式も年を経てどんどん進化しているが、それでも護岸づくりには莫大な金がかかる。「新海面処分場」護岸は、**わずか一メートルつくるためにおよそ三〇〇〇万円かかる**というから驚く。

たとえば埋め立ての高さが一〇メートルだった場合、完成直後の埋立地は**一年間に約四〇センチ沈下する**といわれる。そして沈下量は年々減少していき、**年間一センチ以下になると安定化状態**に入ると判断する。

中央防波堤外側埋立地は、小高い丘陵が続く土地だ。先に記したように、高さ三〇メートルのごみで埋め立てられた丘である。そこには人の背丈を超える高さの鋼管がいたるところに刺さっているのが目につく。これは埋め立てた地中の廃棄物から発生するメタンガスを排出させるパイプである。

かつてごみの島として悪名高かった昭和四〇年代の夢の島では、ごみを捨てて山積みになっていた結果、ごみから出たメタンガスが自然発火して火事となり、何日間も燃え続けるという事態が何度も起こった。以降、埋立地ではあらかじめガス抜きのパイプを打ち込んで常にガスを放出状態にし、発火の危険性を抑制することが心がけられるようになった。

もうひとつ埋立地を管理する中で重要なのが「**浸出水**」の処理だ。浸出水とは、簡単にいうと埋め立てたごみの中を通過してしみ出してくる雨水のことである。

埋め立て処理場にかかわる人でこれを「しびれ水」と呼ぶ人もいる。だれに聞いてもその語源は定かではないのだが、なんとも毒々しい茶褐色の水で、どう考えてもそのまま海に流してしまってもよいものでないことは一目瞭然だ。

高さ三〇メートル、なだらかな丘陵地を思わせる中央防波堤外側埋立地。その丘の中を通過してしみ出した浸出水は、外周道路の脇にある**集水地**にひとまずためられる。処分場内にこのような集水油が一三か所ある。水の温度は四〇度と高く、特に冬になると湯気がもうもうと沸き上がっているのが見える。浸出水は廃棄物が分解されときに発生する熱の中を通過しているため高温になるのだ。

・・・

この処分場における水処理が、実は埋立地づくりの中でもっとも大変なことで、現在使われている中央防波堤外側埋め立て処分場、その一年間でかかる総経費のうち半分近くがこれで飛んでしまうという。その額、年間およそ**二五億円**だ。

横浜にも富岡八幡宮という神社がある。住所も横浜市金沢区の富岡という町だ。深川の富岡八幡宮のほうが今では有名だが、実はこちらのほうが古くから存在する。

建久年間（一一九〇～一一九八）のいつか、というから相当に古い。ときの征夷大將軍・源頼朝が、摂津国難波の商売と海の神様である蛭子ひるこ神を分霊して開いたとされる。その後頼朝は、祖先の源頼義が鎌倉に鶴岡八幡宮を開き、また久良岐郡（現在の横浜市港南区・磯子区付近）に杉田八幡宮を開いたその故事に習い、富岡の蛭子神に八幡神を合祀し、富岡八幡宮が生まれた。

そしてなにより重要なことは、応長元年（一三一―）に起きた**応長の津波**によってこの地域は甚大な被害を被ったが、その際も富岡八幡宮の裏手にある集落一帯は、八幡宮が楯となる格好で波をかわし難をまぬがれたといわれる。そして以降、ここは「**波除八幡**」の別名をもって崇（あが）められることとなったのだ。

そうしたことを伝え聞いていた深川の永代島は、横浜の富岡八幡宮から分霊し、波除けの神様として招いた。

「穴守」とは文字どおり穴が開かないように守るという願いをかけた言葉で、堤防が波の力で壊れないようにという意味をこめた神社であった。

・・・

干拓前、羽田浦と呼ばれたところは寂しい漁師の集落に過ぎなかったこの地には、しだいに料亭や芸妓置き屋が台頭し、穴守稲荷神社はひとつの流行神として、その遊興地の様相を呈してくる。またそうした中、「穴守」という言葉が女性器を連想させるということで、女性の病に効験のある神社としてもはやされることとなり、さらに多くの参拝者を集めることになる。

大田区大森沖の海面に造成された京浜島は、昭和五一年（一九七六）四月に第一次移住がはじまり、四班に分けて六〇社が集う人工島となった。これを機に新しい産業設備の近代的工場をつくるため、東京都が先導する格好で島づくりが進められた

京浜島は都指定の「工業専用地域」ということで、まず工場などの建物内に畳の部屋を設けてはいけないことになった。建物の設計図面にそうした部屋がないか厳しくチェック、点検がなされた。つまり居住できる場所はいっさい認めず、工場だけに専心させる試みだったのだ。

町づくりに関しては、給油所とスーパーマーケットは都の指導で組合化すれば設置することが可能で、食堂など飲食関係は個人単位の営業としては認められないが、自治厚生会館などが主体になるものであれば許可された。

「埠」の一字は訓読みで「はとぼ」と読み、意味は波を止める場、つまり「波止場」だ。

そんな「大井埠頭その1」の中で、唯一居住地としてつくられたのが八潮団地である。昭和五八年(1983)に完成した当初は「団地」という言葉が一般的に使われていたためこう呼ばれていたが、現在は「品川八潮パークタウン」という呼び名が一般的になっている。大井の中では、東京湾に面した東側の大井埠頭に対してちょうどその真裏の西側にあり、東京湾の眺望は乏しく奉るが、そのぶん京浜運河や都市の風景が目の前に広がる。春になると運河沿いに咲き乱れる桜がみごとで、対岸に首都高羽田線と東京モノレールが走る光景とともに人気となっている。

この品川八潮パークタウンの敷地は「その1」の中では大井車両基地に次ぐ面積を誇り、建設当時は「マンモス団地」と呼ばれた。東京ドーム約九個分、四一ヘクタールあまりの敷地に全七二棟が建ち、その住人は一万二〇〇〇人をゆうに超える。建設された昭和五八年前後といえば日本経済がバブル景気に向かう直前であり、京浜地区や都心に通う多くの人々が八潮で住まいの購入を考えた時代だった。八潮団地は品川八潮パークタウンと名前を変える中で、湾岸ライフの象徴的な集合住宅となった。

ガントリークレーンをキリンという。

オペレーターを補佐する作業員を含め1チームおよそ10人。このチーム単位を「ギャング」と呼び、空中司令塔のオペレーターは「ガンマン」と呼ばれている。その呼び名と仕事がいかにアメリカ的。

RORO 船という貨物船をご存知だろうか。船の前と後ろに入口があり、岸壁に船から橋（ランプウェイ）を渡してトラックやトレーラーなどが乗り（ロール・オン）降り（ロール・オフ）できる船である。ゆえにその英語の（ロール・オン／ロール・オフ）を略して「ロー・ロー・せん」と呼ばれる。

まず東扇島だが、この島には倉庫と物流会社、火力発電所、LNG（液化天然ガス）基地、オイルタンク基地しかないので、その仕事の関係者以外はまず行くことがない。したがって、多くの人は興味がなく知らなくて当然だろう。

ただし、この島もよくよく探してみれば公園が島の東西に二か所あり、川崎駅などからの路線バスも走っているので、ごく普通に島に入ることはでき、島内を歩きまわることも可能だ。また、川崎区千鳥町（MAP◎、ここも埋め立て人工島だ）にある「ちどり公園」から川崎港海底トンネル（車道）が東扇島まで繋がっており、それに沿って一二〇〇メートルの**海底歩道**があるので、海の底を歩いて東扇島へ渡ることもできる。

着桟ちやくさん施設（バース）

東京ガスの導管は関東各地のすみずみまで、総延長およそ六万キロメートル（首都圏の高圧パイプラインは九五キロメートル）にもなる。袖ヶ浦 LNG 工場の北側には、「**海底幹線**」と呼ばれる、関東圏の中心部にガスを送り出す重要な管が海に向かって伸びている。海底に埋設された二六キロメートルのパイプラインが東京湾を横切り、東京東部の葛西で陸上に顔を出すと、各地への幹線に接続され送られていく。

そもそもミッドタウンとは何か？ 世界中の都市にミッドタウンと呼ばれる地域はあるが、たいていは**アップタウンとダウンタウンの中間地域**と定義されている。アップタウンとは**住宅地**を指す。欧米の住宅地は高台につくられることが多いので、買い物や遊興に出かけるときは高台から降りていく、という意味で**繁華街をダウンタウン**と呼ぶようになった。

一方、江戸城下の建設にはなにより治水が大切と考えた家康は、東京湾に流れ込んでひんぼんに洪水を起こしていた利根川を曲げて銚子へ放流させる「**利根川東遷**とうせん」を推し進め、これは承応三年（一六五四）四代将軍・徳川家綱によって達成され、家康の代からの壮大な計画だった川の道は完成する。

小名木川はちょうど江東デルタ地帯のど真ん中を横切る運河であり、地盤沈下のようなすが手にとるようにわかる場所だ。川のほぼ中間地点にある**扇橋閘門**こゝもんは別名「東京のパナマ運河」といわれ、まさに**ミニチュアのパナマ運河体験**ができる。隅田川寄りの西側と旧中川の東側とでは水位に高低差があり、東側のほうが一メートルも低い。その水位の違う東西を船が行き来できるようにするため、運河の中に赤い巨大な水門がふたつあり、その間の水路（閘室）に船を入れ川の水を一旦遮断、水位を人工的に昇降させることにより船を通過させるのである。

これは昭和五一年（一九七六）に設置されたというから、それほどむかしのものではない。

羽田の朝一番の飛行機をめざして浜松町から始発のモノレールに乗ると、一〇分たらずでふたつ目の駅に着く。ドアが開くと、車内のあちこちで乗客たちの鼻がひくひくしはじめる。プラットホームの下から入ってくる風に乗って、薫わらの香りというか、牧場の馬小屋のにおいが車内に流れ込んでくるのである。そこは埋め立て人工島・勝島（MAP16）にある**大井競馬場駅**である。東京シティ競馬（愛称）がおこなわれる、大井競馬場の下車駅だ。京浜運河と勝島南運河に囲まれた広大な敷地にはダーツの馬場と六万二〇〇〇人を収容するスタンドがあり、敷地の北東側には、調教師とともに馬が生活する厩舎きゅうしゃがところ狭しと密集して建っている。

モノレールの高架は京浜運河に沿うように走っているから、大井競馬場駅の真下にある厩舎から、風が吹く日は**馬小屋のにおいも車内にたっぷりと**入ってくる。

勝島の名は、太平洋戦争中、鬼畜米英たる連合軍に勝てるように「勝島」と命名された。それに対して、「平和な世の中になりますように」との想いを込めて名付けられたのが、お隣の平和島である。昭和四二年（1967）九月三〇日が正式な誕生日（竣工日）とされる人工島である。

埋め立て人工島の**昭和島**（MAP18）、昭和の時代につくられたことからその名前が付けられた。この島には水再生センターと鉄鋼団地、そして東京モノレール車両基地という**三つの企業しか存在**しない。京浜地区にある、典型的な「仕事の島」である。鉄鋼団地は別にして、ほかの二企業は仕事関係者以外の来訪者は、許可がないと基本的に立ち入ることができないことになっている。

ごみは（摂氏）八〇〇度で焼却処理されると焼却灰になる。ところが、燃やされる前からごみの中にはさまざまな少量の金属をふくんだものが紛れ込んでいる。そこで、一度焼却されたその焼却灰を今度は一二〇〇度というさらなる高温で「溶融」という処理をおこなうのだが、それをおこなう炉のことを**灰溶融炉**という。東京二三区の清掃工場の中でも、この設備があるのは六か所だけである。

そして溶融をおこなうとスラグという砂状の**鉍滓**こうさい（鉍物のような物質）が採れる一方、それとは別に溶融炉の底に重金属類が残る。底にたまるこの金属のことを専門用語で「**炉底メタル**」といい、これが実はたいへん価値の高いものなのだ。金、銀、鋼のほかにはチタン、マンガンをふくんだ塊である。

もともと PCB とは何に使われていた物質かという、工場やビルなどの電圧を変える高圧変圧器（高圧トランス）の中に、絶縁油として使われていたものである。もっと身近なところでは、伝票や帳票の間に挟んで複写に使う、ノンカーボン紙などにも使われていたとても用途の広い化合物だった。

しかしこれがとんでもなく強い毒性をもち、人体にきわめて危険な化合物だと危機感が持たれるようになったのはずいぶん後で、そのときはもう日本全国くまなく PCB は使われるようになっていたのである。

・・・

その PCB 処理方法だが、簡単というと、作業は高温・高圧の熱水の中でおこなわれ、その過程で PCB から塩素を抜き、それをさらに、水と食塩と二酸化炭素に分解して無害化する。数多くの工程を経た最終段階では、下水道に流せるまで無害化して排水される。

一方 PCB が使われている高圧変圧器や高圧コンデンサといった機械類は、まず徹底的に洗浄を繰り返し、その後解体作業を経たあと PCB を抜き取ってから、その無害化がおこなわれる。

この「**東京 PCB 処理事業所**」は一般の見学も可能だが、私たちが実際にその作業状況を見られる場所は、実のところほとんどない。PCB が飛び散ることも危険だが、そもそも圧力をかけておこなう作業のため、外部と遮断しておく必要があるからだ。

現在の桜木町から関内にかけては、横浜随一の繁華街である。だが驚くことにこの一帯は江戸時代、**潟湖**せきこだった。潟湖（英語でラグーン）とは、湾が砂洲によって外海から隔てられ、湖になった地形だ。北海道のサロマ湖や、秋田の八郎潟がラグーンであるといえばイメージできるのではないか。あのような湖が、横浜の市街地に存在したのだ。当時この内海のような潟湖は「入海」と呼ばれていた。

また、現在の横浜港の背後に衝立のようにある高台の野毛山は、かつて海にせりだしていた山で、その山すそを左右に分けるようにふたつの大きな入江があった。人々が暮らす野毛山ではやがて人口が増えはじめたため食料（米など）をつくる平地が必要となり、入江になっている海を埋め立てて新田を拓くことにした。この入海を埋め立てたのは吉田勘兵衛という人物で、江戸時代の寛文七年（一六六七）につくられたこの土地は、**吉田新田**と呼ばれた。